

---

# 恋姫～朱い目を持つ青年～

オシリス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫～朱い目を持つ青年～

### 【Zコード】

N1586Y

### 【作者名】 オシリス

### 【あらすじ】

朱い目『写輪眼』を持つ、うちは一族の末裔兼北郷家の養子兼北郷家10代目党首「北郷 一刀」。今、彼の新たな物語が始まる。

## 主人公設定（注：ネタバレ有り）

【闇夜を切り裂き2つの流星に乗りて、天の御遣い現る。】

その者、朱い目を持ち、火と雷を操り、

赤い雲模様、漆黒の服に身を包み、乱世を沈めん。】

名前 北郷 一刀

年齢 17歳

容姿 顔は少しサスケに似ていて、髪色は黒。

服装はサスケの服に暁の羽織（袖なし）を着ている。

性格 明るく優しい、基本は原作と同じ。

能力 火遁と雷遁のチャクラの性質を使い、『千鳥』に関する技を良く使う。

写輪眼でいろいろな術をコピーしている（コピーしているのは風・水・土遁の三つの性質の術で、火遁と雷遁の術はすべて写輪眼を使わずに努力して覚えた）。

写輪眼は、既に万華鏡（永遠）である。

右は『天照』

左は『天照の形態変化』と『月詠』を宿し、

須佐能乎にはかつて「イタチ」が使用していた『十拳剣』・『八咫鏡』を装備している。

・千鳥・・・片手に電撃を溜め、突進して対象を貫く。肉体活性による高速移動を併用し相手に突進攻撃を行う。

基本的かつ最も威力のある攻撃形態。しかし、全力をもつて加速し一点集中する「ただの突き」であるため、いくら雷遁の術と体術が優れてもカウンターの格好の餌食となってしまうと言つ欠点がある。

「チツ、チツ、チツ...」と鳥の鳴き声に似た独特の攻撃音を発するため、まるで千の鳥が地鳴きしているようであることから千鳥という名が付いた。

・天照・・・燃やしたい所を瞳力の宿る方の万華鏡で目視し、ピン

トが合うだけでその視点から太陽の如き高温の黒い炎が発生する。使用すると相手の火遁の術さえも燃やし、その黒い炎は対象物が燃え尽きるまで消えない。

仮に対象が逃げようとしても、視界に入る限り逃れる事はできない。

また、炎の量は眼の開き具合で決める事も可能であり、一刀は眼を閉じることで鎮火も可能。

術を使用した時のチャクラの量・威力が高いほど、出血を伴う。

- ・天照の形態変化・・・つちは一族でも扱うことが容易ではない火遁の最高峰「天照」をも操ることが出来る能力である。

具体的な効果は天照によつて発火した消えない黒い炎を唯一、形態変化させる事ができる。

- ・月詠・・・瞳力の宿つた目を見た相手に術者が時間や空間、質量などあらゆる物理的要因を支配する自らの精神世界へと対象を引きずり込み、相手に無間地獄を体験させる幻術。

月読は一般的な幻術とは違い、相手の意識に直接干渉し「実際に体験していると錯覚させる」術であり、なおかつ上記の通り時間さえも操れる為、術者は隙を作らずに対象に効果を及ぼすことが可能。その性質より常人でこの幻術を見抜くことは皆無（そもそも術にかかっていることが察知できない）であり、

幻術であるため相手に対しては物理的（肉体的）な殺傷力はまったくないものの、与える精神的なダメージは計り知れない。

天照と同じく使用には大量のチャクラを必要とする。

火の国・木の葉隠れの里、うちは一族の末裔サスケ

一刀が5歳頃、一族の幹部はかつての「マダラ」や「サスケ」の様に、永遠の万華鏡を持つ忍を作るという計画を行つた。そしてその対象に選ばれたのが一族の中でも、「イタチ」と「サスケ」の血を濃く受け継いだ一刀たち兄弟が選ばれた。

一刀の兄「うちは刃」は一刀との殺し合いの日、一刀を守る為、自ら一刀の前で命を断ち、その後、一族の医者が氣絶していた一刀に刃の目が移植した（この時、刃の能力であった『月詠』が一刀に宿つた）。

移植後、意識を取り戻した一刀は、刃を死へと追い詰めた一族を怨み、一族を皆殺した。その後、大雨の中倒れている所を、「北郷双刀」そうとに拾われ、そのまま養子となる。

一族の中でも、天照と月詠を使えるのは、一刀兄弟だけである。

## 運命の出会い

「…………？」

俺の目の前には、見渡す限りの広い大地と遠くの方に村や山が見える。

まてまてまてまて、おかしそ？俺はさつきまで家で義父さんと修行を終え、部屋で仮眠をとっていたはずだよな？？

よし、まずは自分確認だ。

名前は北郷一刀 17歳。

火の国・木の葉隠れの里の特別上忍で、北郷家10代目党首。聖フランチエス力学園2年の学生で、現在彼女募集中・・・・。

・・・・うん、自分で言つて悲しくなってきた。

つてあれ？俺なんで羽織を羽織つてるんだ？  
それにこのバックは俺のだよな。えっと中身は

着替え（下着×3、上の服の換え×2、その他×2つずつ）と眷物一つが入つっていた。

## 巻物の中の術式

クナイ&手裏剣×500 起爆札×200 煙玉×50

閃光玉×50 千本×50 大型手裏剣×30

芭蕉扇 僕が作ったオリジナルのチャクラ刀「桜」

槍「震虎炎紅槍」 壇月刀「雷龍壇月刀」

籠手「轟紅銀鍊照」

うん。俺が何時も使つてゐる忍具フル装備だね  
・・・・・って、そんなこと言つてゐる場合ぢやない。

「（此処がどこか分からぬ以上、氣を引き締めないとな。）

桜を腰に差し、頬を叩き、氣を引き締める。  
そしてこれからどうじよづかと思つてゐると後ろから声がかけられた。

？「あの～あなたが天の御遣い様ですか～？」

「え？」

その声をかけてきたのは、かわいい女の子だった。

つて、天の御遣い？なんだそれ？

そんなこと考えてこらる

「あ、あのお～～・・・・・

「え？あ、ああ、なに？」

「お兄さんって、天の御遣い様ですよね？」

「え～～と、その天の御遣いってなに？後このがどこかわかる？」

困惑した顔で、女の子に聞いてみる

「ここは、幽州琢郡の五台山の麓です。それで天の御遣いってい  
うのはこの戦乱の世を治めてくれると管轄すらやんつていう占い師さ  
んが言っていたことです。」

女の子は笑顔で説明してくれた。  
かわいい子だな～・・・・・・・と、見とれてる場合じや  
ない。

「えっとなんで俺が天の御遣いだと思つの？」

「さつさ密から流星がこの場所に落ちてきり、セイヒのお兄さんが  
いたからです。」

「（そつ、それだけで…………）」  
（やがて名前がやがて名前聞いて  
なかつたな）

俺は北郷一刀つていうんだけど

「いいですよ、私は劉備、字は玄徳つていいます。」

「…………へ？」

彼女の名前を聞いて、俺フリーズ。

彼女は今なんていつた？劉備？

劉備つて、あの劉玄徳？でも確か劉備つて男じやなかつたか？

「あのそ、本当にさつこう風な名前なの？」

「はい。さつですよ

劉備？は笑顔でうなずく。「つかつてゐるよつたな感じじやないし

本当つぽい

そしてさつき劉備は、

「いは、幽州琢郡ですよ」つて言つてた。（『星はついてな

いよ b y 作者)

幽州、そして劉玄徳。

これらが本当だとすると、ここは漢王朝時代の可能性が高い。それも後漢末期ってところか？

そしてまさかのタイムスリップへ。ジジのアニメなんだよ。・・・・・

卷之三

「お姉ちやーーーーーん！」

俺がそんなことを考えていると劉備の後ろから2人の女の子が走ってきた。

一人は黒髪の女の子で、もう一人が赤い髪の小さい女の子だ。

「愛紗ちゃん——ん! 鈴々ちゃん——ん!」

と言いながら劉備が手を振つてゐる。

「（劉備の知り合いか。・・・・・ん？でも、確かあの黒髪の子が桃香って言つたな。あだ名かなんかか？）」

考へてゐると二人が俺達の目の前にまでやつてきた。

「桃香様…心配しましたよ…一人でふらふらといなくなつてしま  
われて…まったく、」ちひらの事も考えてください…」

「そうなのだあ…お姉ちゃんは自由すぎるのでだあ…」

「ががーん！鈴々ちゃんに自由すぎるってこわれたよ…・・・ち  
ょつと落ち込むかも～」

「（ははっ、仲よくなつだな、あの一人はよっぽど心配だつたん  
だな）」

三人の仲のよさうな光景見ていて気がつかなかつた、小さい女  
の子がこつこつを見ていた

「こやつ？桃香お姉ちゃん、このお兄ちゃんだれなのだあ？」

小さい女の子がこつこつ指を指しながら囁つてきた。

「い、いじり…鈴々！失礼じやないか、指をさすんじやない…！」

黒髪の女の子が慌てながら小さい女の子の手を降ろした。

「ほら北郷一刀さん、天の御遣い様だよ。」

笑顔で言つ劉備の言葉にふたりは驚いた顔をしていた。

「あなたが管路の言つていていた天の御遣いなのか？」

「お兄ちゃんが天の遣い様なのかあ。」

「（…………ん、なんかむずかゆいな。）」

四つの皿にまじまじと見られて少しムズムズする。

「あれ? なんで、愛紗ちゃんと鈴々ちゃんがそのこと知ってるの?  
?」

「わきほび、桃香様を探しているときに管路に出合つたのです。  
その時に聞いたのです。

天より降りし流星はこの乱世を治めてくれる天の御遣いだと、  
いろいろな町や村で言つあわつてるやつです。」

「へえ、そつなんだあ~てつきり私だけが知つてるのかと思つ  
ちゃつた。」

腕を組みうんうんと首を縦に振つていた。

俺はつい「かわいい」と思っちゃう。いや、俺じゃなくて  
も絶対に思っちゃうはずだ！

などと思つていゆるが、黒髪の女の子は俺の前に来た。

「初めまして北郷一刀殿、

我が名は関羽、字は雲長。以後お見知りおきを。

「お兄ちゃん！ 鈴々は張飛なのだ！」

その瞬間、辺りには俺の驚きの声が響いた。

これが俺と彼女たちとの出会いの日の事である。

そして、これから始まる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

来事であった。  
・・・・・長い長い物語の始まりの口の出

## 運命の出会い（後書き）

『桜』 真の名は『和道・桜蘭香十文字・菊重』 は一族党首の証であり名刀。刀身はほんのりピンク色に染まつて、連続攻撃に適しており、一振りすれば桜の花びらが舞い、まるで使用者が舞い踊っているかのように見える。その美しさから多くの者が譲つてくれを頭を下げ、断られれば力ずくで手に入れようとしたほど。

『震虎炎紅槍』 ・・・・・・火のチャクラを纏う事ができ、纏つた火の形を自在に変え攻撃するうちは一族の党首の証。見た目は蒼竜煌閃槍の朱い版。

『雷龍堰月刀』 ・・・・・・雷のチャクラを纏い攻撃する。北郷一族党首にのみ持つことができる忍具。見た目は真・三国無双6の青龍堰月刀の黒い版。

籠手『轟紅銀鍊照』 ・・・・・・五大性質すべてのチャ克拉を纏うことができる特殊な素材で出来ている。見た目は『REBORN』のツナのグローブ（未来編以降、大地の七属性編のモノ）。

「ええ！？ 関羽と張飛って、あの関羽と張飛か！？」

驚き顔で一人に聞いてみる。

「どの、かは知りませんが、私の名は関羽です」

「あの張飛なのだ！」

・・・・つそをついてないな、写輪眼を使わなくとも分かる。

しかし、どうなつてんだ？ 劉備も女の子だったし、関羽・張飛まで女の子つて

・・・・正直もう、わけが分からぬ。

「はいはい、自己紹介も終わつたことだし、私から提案があるんだ。

一刀さんに私達の『主人様になつてもうおつと懇意つの

劉備が満面の笑みでこう言い・・・・つて、えつ？』主人様？

？』主人様つて？あの？』主人様か！？

「桃香様！？それはいったいどうゆうことですか！？」

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、私達は弱い人達が傷つき、無念を抱いて倒れることに我慢ができなきた。

少しでも力になれるのならって、そう思つて今まで旅を続けてきたでしょ？」

「はい」

「なのだ

劉備の言葉に一人が返事をする。

「でも・・・三人だけじゃもう、何の力にもなれない。  
そんな時代になつてきている・・・」

「・・・」

「・・・」

二人は無言のまま何も言えなかつた。

「確かに桃香様の言うとおり、既に我々だけではどうしようもないところまで来ているのかもしれません。

大陸には、さまざま負の感情が満ち、既にあちらこちらで暴動などが起きています」

「・・・・・」

その言葉に劉備は何も言えず黙つていた。

「そうなのだ・・・・・三人じゃ、もう何も出来なくなつているのだ・・・・・」

俺は三人の話を静に聞く。

「でも、そんなことで挫けたくない。  
無力な私達にだつて、何か出来ることがあるはず。・・・・・だから」

「・・・・・なるほど、桃香様のお考えがわかりました」

「鈴々もわかつたのだ」

「（・・・・?なにが分かつただ?）」

なんだか知らないが三人にはなにかわかつたようだ。

そして劉備は俺の方に近づいてきた。

「一刀さん！」

「お、おう！？」

「私達に力を貸してください！」

「はあ！？」

なにを言つてゐんだ劉備は！？

「お、落ち着け！俺は君達が考へてゐるほど、すこいもんじゃないぞ！？」

「神でもないただの人間だ！！」

「そう、俺はただの人間。忍術を使えても、死人の命を蘇らせる事も、災害から人々を守ることも出来ない、ただの人間だ。

「分かっております。しかし、我等にはあなたが必要なのです。  
…………いえ、本当に必要なのは、あなたの天の御遣いという肩書きなのです」

「肩書き？」

「はい。我ら三人、憚りながらそれなりの力がある。  
しかし、我らにも足りないものがあります。・・・・・それ  
は」

「名声、風評、知名度・・・・・人を惹きつけるに足るそういう  
つた実績が鈴々たちには無いのだ」

「そう。本来は、そういう評判を積み重ねなければならない。  
・・・・・しかし大陸の状況は、すでにその時間を私達にく  
れそうにもないのです」

「一つの村を救えても、その間に他の村の人達が泣いている。  
・・・・・もう、私達の力だけじゃ限界がきているんです」  
「・・・・・なるほどな。だから、天の御遣いという評判を  
利用し、  
大きく乱世に羽ばたく必要があるってワケか・・・・・・・・・・

確かに。ここが三国志の、しかも後漢末期だからこそ、  
そういういた神懸かりの様な評判は、劉備たちにとつて大きな力に  
なる。

迷信や神様への畏怖つてものが、人の心に強く関係していた時代、  
天の御遣いが劉備のそばにいる。  
・・・・・それだけで、人々は劉備に敬畏の念を抱くよ  
うになり、その行動を注視するようになる。

注視するようになればこそ、劉備の行動に共感する人間や心服する人間が、飛躍的に増えていく。

それが知名度であり、名声つてものだ。

「（…………さて、どうする？偶然とはいえ、いきなりこの世界にきて帰る方法もわからない。）

・・・・・なら、今、目の前にいる、劉備、关羽、張飛に力を貸すのもいいかもしれないな。）

スーザー…………」「

大きく深呼吸した後、固唾を呑んで返事を待つている三人に向ける。

「……わかった。俺でよければ、その御輿の役目、引き受けるよ」

「ホントですかー!?」

劉備がうれしそうに言つてきた。

「だけど、少しの間だけ時間をくれ…………じばらぐー」の

世界を見て情報や状況を確認したいんだ」

そう。俺はわざわざこの世界に来たばかりでなにも分かっていない。少しの世界を見て回つて自分の目で見て確かめたいしたい。

「どうだらう?」

俺は三人の眼を真っ直ぐに見つめた

「わかりました、一刀さんこちらのお願いを聞いてくださいたんですから」

「それに、北郷殿の眼には優しい光が灯つているような感じがします」

「うんうん、お兄ちゃんすうじい眼なのだ…」

三人がそれぞれの答えを返していく。

「・・・・・ ありがと」

おれは、三人に感謝を込めてお礼を言つ

あの後、俺たち四人は近くの村で食事をしたんだが、この世界に来たばかりの俺は当然、この世界の金は持っていない。そして劉備たちも金を持つていなかつた。

結果、俺は無銭飲食と勘違いされ、結果捕まつた。まあ、店の手伝いをすることで許してもらつたんだけどな。そして、お店の手伝いを終え、店を出るとか、おかみさんからお酒をもらつた。

「やつらのおかみさんの話だとここの辺だよな?」

「そこそこ、おかみの話だよな?」桃園があるはずなのですが

「それでも、あのおかみさんといひひだつたね~

「お酒、お酒なのだ―――早く飲みたいのだ―――!」

今、俺達はおかみさんを教えてもらつた桃園に向かつてこる。

「おや、やつらの話聞いてこらしゃへ、心援してこらへ

と囁いてくれた。

『うーん、劉備が「あー、うーん」とか白連ちゃんが「あー」とか、あたりに赴任するつて囁いた!』と囁いたときは正直ガクッとした。

関羽が「もーと早くに仰ってください」と囁いたら「あー」と落込んでいた。

本当に仲がいいんだなって思つたよ。

それともう一つ変わったことがある。  
おれの呼び方が変わった。兄だ。

最初は「主人様だったんだが、流石にそれだけはやめてくれと言つたんだが、劉備に「えー、じゃあ、お兄ちゃんつて呼びますね。年は私たちより上でだし」とて言われたので、仕方なくそう呼んでもらうことにした。

そんなことを考へていろいろ話し、目的地に到着した。

『おお』  
。

一面に広がる桃色の世界。

「こ」れが桃園かー…………すごいねー

「美しい…………まさに桃園といつもふさわしい美しい美しさです」

「ホントだな。…………里のはずれにある桜の森みたいだ」

「ほお……兄上の居た天にも、やはりこれほど美しい場所があつたのですか。」

「咲いていたのは、桜つて花だけどな。…………すごく綺麗だつたよ」

「雅だねえー」

などと、三人でしばしの風雅を楽しんでいると、

「ああ酒なのだー！」

ワクワクした表情を浮かべた張飛が、俺の周囲をクルクル走り回る。

「…………約一名、ものの雅も分からぬ者も居るようですが

「あははっ、鈴々ちゃんらしくねー」

「うういのかねえ。・・・・・。ついで、劉備たちはみんなの「」とを愛称かなんかで呼んでるけどいいたいなんなんだ？」

俺が聞くと、三人は驚きの表情で「うちを見た。

「お兄ちゃん、もしかして真名を知らないの？」

「ま、真名？・・・・・真名ってなー？」

俺が尋ねると関羽が答えてくれた。

「我らの持つ、本当の名前です。家族や親しき者にしか呼ぶ」とを許されない、神聖なる名・・・・・」

「その名を持つ人の本質を包み込んだ言葉なの。

だから親しい人以外は、たとえ知つていても口に出してはいけない本当の名前」

「・・・・・ちなみに、もしも勝手に呼んだらどうなるんだ？」

「？」

「殺されても仕方あつません」

関羽の答えを聞いた瞬間、自分が顔面蒼白になるのがわかつた。

・・・・・ 呼ばなくてよかつた一つと心のそこからそつ

思  
考  
た

「だけば、お兄ちゃんになり呼んで欲しいのだ」

え？・・・・・いいのか？大切なモノなんだろ？」

「鈴々はいいのだ！」

「私もだよ！」

「私もです」

- 1 -

誰でも呼べるわけじゃない、特別な名前。

正直、天の御遣いなんて役をどこまでできるか  
・・・・・全くもって自信は無い。

それでも。

俺を信じてくれる人が居るのなら、精一杯その期待に応えたいと思つ。

「・・・わかつた。じゃあ、えつと・・・」

思  
考

「我が真名は愛紗！」

「鈴々は鈴々！」

「私は桃香！」

「愛紗、鈴々、桃香・・・・・・」

それぞれの真名を呼びながら、少女たちをまっすぐに見つめる。

「俺はまだ、何をすれば良いのか。何が出来るかはわからない。  
けど、俺は君たちの力になれば、とそう思つ。  
・・・・・だから俺も、改めて名乗らなくちゃね。」

俺は三人に向き合い、真剣な顔で改めて自己紹介する。

「俺の名前は北郷一刀。火の国・木の葉隠れの里所属、北郷家10代目党首だ。

「これからどんなことがあるか分からぬけど、宜しくお願ひします！」

「うん！」

「はつー！」

「いいのだ！」

三人がそれぞれへんじをしてくる。

俺は三人に真名代わりとしておれ自身の秘密を教えた。

忍術のこと、『与輪眼のこと、そして旧家である北郷一族のことを、  
流石に万華鏡やうちはの事は教えることはできないから、その辺  
りはうまく隠した。

途中、三人から質問攻めにあつたが、疑問はすべて答えた。

チャクラは「ちらでは『氣』を言った方が伝わりやすいことも分  
かった。

つというか、横文字全般が通じなかつた。

そしてすべての質問に答えた後、

それぞれの手に持つた盃にお酒をそそぎながら、

「それにしても、まさかあの有名なシーンに自分が同席するとは  
思わなかつたな」

「どうかしたの?」主人様

「いや、いろいろとね。・・・・・感傷深いというか。この後、まずは何処へ行こうかなーとかね」

「前を向いて一歩一歩、歩いていくしかないでしょうね」

「立ち止まつてもしようがないのだ」

「・・・・・鈴々の言う通りだな。

まあ、これから先、大変な道のりになるけど、改めてよろしく

「じゃあ、結盟だね!」

「ああ!」

そんな俺をみていた愛紗が、掌で包んでいた盃を、空にむかって高々と掲げた。

愛「我ら四人!」

桃「姓は違えども、兄妹、姉妹の契りを結びしからは!」

鈴「心を同じくして助け合い、みんなで力なき人々を救うのだ!」

「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも!」

桃「願わくば同年、同月、同日に死せん」とを。」

4『乾杯っ！』

？桃園の誓い？

まさか自分がこの三姉妹の兄妹入りするとは、思わなかつたけど、  
誓いを立てた以上破るわけにはいかない。

彼女たちのため、自分が死なないためにも、もつともつと強くな  
るつー。

彼女たちを守り通すためにーー

俺は心の中でそつと、別の誓いを立てた。

## 桃園の誓い（後書き）

はい、一刀たちを4兄妹にしました。

一刀を一番上の長男で、

桃香を長女、愛紗を次女、鈴々を三女にしました。

桃香たちはそのままですが、一刀をその上の兄にしてみました。

それでは次回をお楽しみに――――――！

## 三國鳥との出合

俺が旅に出て早数ヶ月が過ぎようとしている。

桃園で誓いを立てた後、俺たちはそれぞれの目的のために別れた。

桃香たちは、桃香が私塾にいた頃の友人、公孫賛へ会いに、

俺は大陸を回り、情報集めと主だった武人に会うためにな。

道中、桃香たちの噂をよく聞くようになった。

噂には、桃香たちが無事、公孫賛の下で義勇軍を立ち上げたこと、

諸葛亮と鳳統が仲間に加わったことなど、いろいろあったが、

俺としては、桃香たちが無事なことが分かつてよかつたと思つて  
る。

旅を始めて困る事は食料だ。

まあ、俺は義父おやじに鍛えられたから、何とかなった。

…………この時、初めて義父おやじに感謝したかもしれない。

そんなこんなで、俺はある村にやつて來た。

食料はさて置き、情報を収集するためにな。

――「…………変だ。人の気配がない」

村にしては大きめの感じだが、肝心の人の姿が見えない。

とりあえず人を探すために村の中を歩き回っている。

? 「そこの者、止まれ！」

「ん？」

声をかけられ振り向くと、手甲をつけた俺と似た髪の色をしてい

る少女が俺を睨んでいた。

「見ない顔だな、何者だ！？」

「」の村の人か？ ちょっとびい、他の人達はどこに

？「質問に答えろ！」

すゞい剣幕だな。今にも殴りかかってきそうだ。

「落ち着け俺は

？「待つんぢやない！」

俺が落ち着かせようとした時、後ろから一人の少女がやつて来た。

? 「凪ちゃん、その人は違うと思うの~」

? 「黄色い布を巻いとらんし、間違いないやろ」

二人がそう言つと、少女は「まつ」と言つたようなが表情をした後、頭を下してきた。

? 「すつ、すみません!」

「いや、良いよ。間違いは誰にでもある」

俺がそういうと、三人はほっとした表情を見せる。

? 「怒つてなくてよかったです」

? 「でも、そうだとしたら兄さん何者なんや?」

「俺は旅人だ。この村には情報を集めるために立ち寄ったんだ」

? 「そうですか。では早くここから逃げてください。」

銀色の髪の少女が、俺に言つ。

「逃げる? なんでだ?」

? 「もつねぐこの村に黄巾党が攻めてくるの」

黄巾党といふと・・・・・あの黄巾党か・・・。

? 「せやから早く逃げた方が・・・・

「いや、俺もこの村を守るのに力を貸そ」

『えつ?』

俺の言葉に三人は驚く。

? 「何ゆつてんねん!」

? 「そうなのー早く逃げるのー」

? 「そりですー戦は遊びではないのですよー」

「別に戦を遊びとは思つていない。

それに、今は一人でも多くの助けがいるんじゃないかな?」

『グツ・・・・』

俺の言葉に三人はグーの根もでない。

? 「わかりました。ですが、危険だと判断したら、すぐに逃げてください」

「ああ、わかつた。俺は北郷一刀だ。君らは？」

俺は三人に名を尋ねる。

？「私は樂進といいます」

？「沙和は于禁なの」

？「ウチは李典や」

・・・・・うん、まあ、予想はしてた。

桃香たちが女の子なんだから他の武将も女の子かなって、

・・・・・まさか、本当にその通りだつたなんてな・・・。

もう俺は驚かない。絶対に驚かない！

そう心に誓つた。

それからしばらへして、主だった作戦を三人に説明した。

「まず、この町に決定的に足りないのは防壁だ。  
これじゃあ、あつといつ間に攻められる」

「それではどうするのですか?」

「李典、ここに書いてある防柵を作れるか?」

俺は李典に即席で作った設計図を渡す。

「これやつたら作れんことないで。いくつくらいいるん?」

「できるだけ多く頼む。特に東の防壁が薄すぎるのはからな。  
大体西南北に30、東に50くらいでいい」

「あかん、それは無理や。材料が足りへん!」

李典は「しまった!」つとつ表情をする。

まあ、こきなり賊（黄巾）が攻めてきて蓄えがなかつたんだろ?。

「しようがない。李典、東は俺が着く。防柵は先に西南北に配置してくれ。」

その後で余った分を東へ配置してくれ」と

「なつ！ そんなんあかんで！」

「ちよつ！ いくらなんでも無茶なの！」

「ついです！ 無謀すぢます！」

東へ着くと言つた瞬間、三人から止められた。

・・・・・火遁・豪火球の術』

۲۷۰

俺が豪火球を何もおいてない所へ放つと三人は驚きの表情を露にする。

「……術については後で説明する。今は俺を信用してくれ

• • • • • ( ፳፻ )

俺の真剣な表情から察してくれたのか、三人は何も言わず頷いてくれた。

「よし、じゃあ、俺は東、李典は西、于禁は南、樂進は北の城門に着いてくれ。

李典、防柵はできるだけ早く、三つの城門へ設置してくれ」

防衛の説明が終わると、俺は次の作戦の説明の移る。

「さて次だが、賊は恐らく防壁の薄い東に集中してくる。だから東は俺一人で相手をする。

さつき見てもらつたから分かると思うが、見方が入れば巻き込んでしまうかもしないからな。

樂進、于禁、李典も油断せず各門へ近づく賊を倒してくれ。

主な作戦は以上だ。みんな援軍が来るまで頑張ってくれ！」

『はつ！』

説明を終えると、三人と兵たちは、各自準備を始める為移動する。

さて、いよいよこの人生初めての戦だ。

今まで任務で人を殺めたことはあっても、戦争はしたことが無かつたからな。

それからしばらくして、すべての城門に防櫓が設置された。東は数は少ないが、それでも30は配置できた。

「樂進様より伝令。北から陳留の曹操様の援軍が到着したとのこと。

至急、北郷様にお越し頂きたいとのことです」

どうやら援軍が間に合つたようだ。

「わかつた、すぐに行く。

すまない、敵が着たら狼煙を上げてくれ

「わかりました！」

兵に敵が着たら知らせるように頼むと、俺は急いで樂進のもとへ向かった。

「遅くなつてすまない！」

俺が声をかけると、それに気づいた楽進がこづちに体を向けた。

「北郷殿、いえさつき伝令を送つたのですから、随分早いと思います」

「そういうて貰えると助かる。そっちの一人が援軍の？」

俺は楽進の後ろにいる一人へ視線を送る。

「はい、陳留からの援軍を率いている将の方々です」

楽進の言葉で、後ろの一人は挨拶していく。

？「ああ、私の名は夏侯淵。陳留太守、曹操様に仕える将だ

？「僕は許諸一よろじくね兄ちゃん！」

「へー、まさか夏候淵がこんなに綺麗だとわな。許緒はまだ子供なんだな。

「俺は北郷一刀。よろしく一人とも」

うん！」

元気よく返事してくれる許緒。なんか鈴々に似てるな。

「我らの本隊ももうじき」から到着するだろ？」「

「 そ う か 、 そ れ は 助 か る 。 そ れ じ や ま ず は 作 戦 に つ い て 説 明 す る 」

俺は今ついた夏候淵たちに作戦の説明する。

## 説明中

「…………つていうのが、俺の考えた作戦だ」

「だめだよー。そんなんじや呪わやん達が危ないじゃんーー。」

「私も同感だ。あまりにも危険すぎる」

俺が説明を終える。途中、李典と于禁も合流した。当然ながら、さつき着いたばかりの一人からは物凄い反対を受け る。

まあ、当然か。

「心配ない。俺には忍術があるからな」

『忍術?』

「ああ、楽進たち三人はさつき見せただろう?」

俺が言つと、三人はあと頷く。夏侯淵たちは知らないから、まだ頭に?が見える。

「忍術って言つのは簡単に言つと、己の中にある氣と呼ばれるモノを火などの性質に変えて、相手を攻撃したり、自分の肉体を強化したりするモノだ」

『つ……』

「はにゅ?」

俺の言葉許緒以外が驚く。

「気つて、あの氣かいな！」

「驚いた。まさか、氣を自在に操ることができる者がいるとは…。  
」

「それなら風ちゃんも使えるのー！」

「本当なのか楽進？」

俺は楽進に尋ねる。

「はい。ですが完全に扱えるといつわけではありません」

「なるほど、まあそういうわけだ。東の城門は俺に任せてくれ

「だが、いくらその忍術が使えても一人では、危ないことには変わりないだろ？」

やはり忍術を持っている」と説明しても、夏候淵は反対のようだ。

「心配ない。俺はさらに特殊な力を持つていてるからな

『特殊な力？』

「ここまで来たらしそうがないな。そう思い俺は田を写輪眼に変えた。

۲۷۰

これが俺の力……………写輪眼だ

流石にいきなり目の模様が変わつたらそりや驚くわな。

「目の、・・・目の模様が変わった・・・」

「真っ赤なの〜！」

驚いた！ 兄さんほんまに何者なん？

何者かにて置かれてもな——

うんと俺は考えてしまう。

「(なんて答えるべきなんだ?)」

俺が悩んでいると、許緒から言葉をかけられた。

「ねえ兄ちゃん。もしかして兄ちゃんつて天の御遣い様?」

「うん？ ああ、そういう呼ばれるのもあるんだ？」

俺が答えると許緒以外がまた驚く。

「そりゃあどうして気が付かなかつたんだ！」

北郷殿服装 黒い布地に赤い雲模様の服

「本當だ〜〜！全然気付かなかつたの〜〜〜！〜」

「確かに、せやつたら兄さんが忍術つていうの使えるのが説明つ  
くで！」

「本当に驚かされてばかりだな。まさか天の御遣いが本当にいたとはな・・・」

「ほえ、本当に兄ちゃんが御遣い様なんだ～！」

なんか各自勝手に納得してるけど今がチャンスだな！

「まあそういうことだ。被害を最小限に抑える為にも協力していく

# れ夏候淵！」

「…………わかつた。そういうことであれば仕方ない。東は  
北郷殿に任せよう」

「ありがとう。」

俺は笑顔でお礼を言つた。

『 / / / / / / / / / / ! ! 』

うん？なんかみんなの顔が赤いよつな・・・・・・つま、気のせいか・・・

その後、詳しい説明（馬輪のことなど）をした後、各自配置に着き、黄巾の奴らが来るまで警戒を怠らずに、英気を養うことにしてた。

「（いよいよ初戦だ。しつかり気を引き締めないとな）」

俺も戦のために準備を始めた。

## [[図解]]の出版ご（後書き）

はい、今回は臣たちとの出版ごを書いてみました。

…………え？ 早あがねひて？

ははは、やんないじキーシナバイキーシナバイ。

ではでは、また次回。

「来たか・・・・」

あれから数時間、東に大きな砂塵が見えた。

「ずいぶん遅かったな。まあ、そのお蔭でこつちは足りなかつた防柵を作ることができたし、いろいろ準備もできた。

「これで俺も思う存分相手できる」

そう、材料がなくて足りなかつた防柵は、夏候淵たちの部隊から材料を貰つて完成させた。

俺も装備を桜から雷龍堰月刀に変えた。すべての城門に加重石の術をかけてさらに防御を強化した。

「さて数は・・・・・・1千つてところか。全体で2千くらいつて効いたからな。やつぱり東に集中して來たな。・・・・・・だが、俺の敵じゃない」

そう、俺は小さい頃から義父の修行でこういつた事をして來た。暇があれば暗部やらを連れて來ては戦つてきた。もつと多い時は術を使わずに3万人と、術を使った時は5万と戦つたこともある。

それと比べれば千人、ましてや術も使えない者達の相手をするなんて赤子の手を捻るより簡単だ。

「さて、大分近づいてきたな。いつちよ派手にやるか

俺は写輪眼状態に入り、印を結んだ後、両手を地面に置いた。

「土遁・地殻変動の術！」

術を発動させ辺りの地形を変える。城門前に大きな岩の壁を作り、アスレチックのように地形を凸凹にして、敵側に大きく深い堀を作った。

「水遁・滝壺の術！」

その後、堀の中を水で満たし、俺は堀の外側に出る。

「精々楽しませてくれよ？（火遁・豪火蒼球の術！）

俺は飛び上がり、敵陣の中心にうすは秘伝忍術の一つ、豪火球の強化版を連続で打ち込む。

広範囲で威力の高い術を中心部、敵は陣形 자체、形成してないの  
で正しくは人の塊の中心に打ち込んだ事により、黄巾の連中は「ば、  
化け物だー！」つていいながらビビッて逃げていく。  
これでもう半分くらいしか残つてない。

もちろんこの位では終わらない。雷龍（堰用刀）に雷性質の氣を  
纏わせ、バツサバツサと黄巾連中を切り捨てていく。

その時、ドーン！ドーン！と大きな銅鑼の音と多くの歓声が聞  
こえたので町の方を向く。

どうやら曹操の本体が到着して、ここ以外は終わつたんだろ。つ。  
城門の上には、樂進たちと一緒に、さつきまで居なかつた金髪の  
少女、長い黒髪の女性、猫耳被つた少女がいる。

恐らくあの金髪少女が曹操だろ。霸気が他の者とは比べ物にな  
らないからな。

「それじゃ、みんな待つてるようだし・・・・・・・そろそろ終わら  
せるか」

俺は大量の氣を練り、印を結ぶ。

使うのはうちはの秘伝忍術の中でも、豪火球の術の中でも、威力  
も攻撃範囲も最高クラスであり、難易度Sの超高等秘伝忍術。

「…………火遁・豪火滅却」

俺はこの術を敵前方へと打ち込む。

黄巾の連中は抵抗もできず、ただただ業火に焼かれて死んでいった。

「これが戦か…………案外呆氣なかつたな」

俺は地形を元に戻す。

「（結局、地形を変えても無駄だつたな。相手が弱すぎて話にもならない）」

そんな事を思いながら、俺は町へと戻った。

城壁サイド

「なつ…………なんて圧倒的な戦なんだ」

呂（樂進）たちは曹操軍の本隊と合流して、黃巾党を倒した後、東の様子を見に来ていたのだが・・・

そう口を開いたのは、曹操軍の猫耳軍師こと桂花（荀？）。

「確かに、・・・・・秋蘭（夏候淵）から天の御遣いとやらの事は聞いていたけど、これほどとわね・・・」

驚きながらも、欲しいわねあいつ的な顔をしながら笑みを浮かべている金髪の少女。我等が大将こと、華琳（曹操）は言つ。

「私も驚きました。まさかこれほどのモノだったとは……」

一刀や忍術の事を華琳に報告した秋蘭さえも驚いている。

そして呆気に取られてるのは魏武の大剣こと春蘭（夏候惇）、季衣（許緒）、真桜（李典）、沙和（于禁）の四人である。

春蘭に関しては、さつきまで「そんな奴私が倒してやる」的なことを言っていたのだが、実際一刀の戦いを見て、啞然としている。

「どう春蘭？まだ御遣いと戦つ意志はある？」

「と、意地悪そうな顔をした華琳が、これまた意地悪そうに春蘭に言つ。

「はつ、はい！あんな奴私が捻り潰して見せますー」（プルプル）

「と、本人は言つているが、声も震えてる。何より足が生まれたての小鹿みたいになつていてる。

「ああ・・・、姉者はかわいいなあ・・・」

そんな春蘭を見て秋蘭は萌えている。

「はあ、春蘭。いくらなんでもあんなのに勝てる分けないでしょ。

「いらっしゃるあなたが馬鹿で脳筋でもそれくらい分かるでしょ？」

「なんだと……もう一度言つてみろ桂花……」

「なんだだつて言つてあげるわよこの脳筋……いらっしゃるなんでも気づくでしょ……」

つと、一人は喧嘩モードに突入する。

「はあ、一人がこうなつた以上じばらくこのままね。  
秋蘭、季衣。私たちは彼に会いに行くわよー。」

『まつ（まじー）』

そういうと華琳たちは、喧嘩している一人をまつて歩き出した。

「沙和、真桜。私たちもいくぞー。」

『おつ、おつー（なのー）』

その後に風たちも続き、一刀を迎えて行った。

カジノアドバイザリー

## 初陣（後書き）

火遁・豪火蒼球の術・・・豪火球の術の強化版。うちはに伝わる秘伝忍術の一つで、火遁最高クラスの術の一つ。自分の前方ほぼ全てを多い尽くすほどの巨大な炎を放つ。威力・攻撃範囲共に最高クラス。

火遁・豪火滅却・・・豪火球の術の強化版。うちはに伝わる秘伝忍術の一つで、火遁最高クラスの術の一つ。自分の前方ほぼ全てを多い尽くすほどの巨大な炎を放つ。威力・攻撃範囲共に最高クラス。

土遁・加重岩の術・・・触れた物体を石化させたり、岩のように重くし行動不能にする術。

土遁・地殻変動の術・・・自分の周囲の地形を自在に変える事ができる。

水遁・滝壺の術・・・水脈のない場所に湧き水を起こし、水流を操ることで滝を生み出す術。

「一刀殿――――――！」

俺が町へ入つてすぐ、匪たちが二つちへ走つてきた。

「おう、そつちは終わったようだな」

「はい――一刀殿と曹操様のお蔭で町は救われました。本当にありがとうございました」

「ほんまおおき!」

「ありがとうなの~」

樂進たちは頭を下げてきた。

「――ってそんなの、困つてゐる人がいたら助けんのは当たり前だからな

「あら素直に受け取つておいたりいいんじやない?」

俺が樂進たちに頭を上げるよつて言つと、さらに後ろから、さつき俺の戦いを見ていた金髪少女とその後ろから夏候淵と許緒がやつ

て来た。

「（…………やつぱりあの子が曹操か……）」

曹操は俺の前まで来た。

「はじめまして、私は曹操。…………あなたは御遣いで合つているわよね？」

「ああ、そう呼ばれることがある。俺は北郷一刀。字はない。北郷か一刀って呼んでくれ。」

「字がないの？…………まあいいわ。

今回はありがと。一刀がいなかつたら、今頃どうなつていたか分からなかつたわ」

「いいよ。さつきも言つたけど困つてる人がいたから助けた。ただそれだけだからさ」

「…………」

俺は曹操に改めて言つ。すると曹操は黙つて俺の顔をジッと見てくる。

「やつぱりいいわ。あなた欲しいわね…………」

「え？」

「と曹操は「みーつけた。私の獲物」的な笑みを浮かべ俺に言ひ。

「どう一刀。私のところへ来ない?私にひいてこれば、いずれ大陸を支配できるわよ?」

「…………なんひてこひた。まさかあの、天下の曹操様からお誘いがくるなんてな。

「…………悪いけど断らせてもらひよ」

『ひーー。』

俺が曹操に返事を返すと周囲にいた楽進たちは驚く。

「…………理由を聞かせてもらひていい?」

曹操も若干驚いている。まさか自分の誘いが断られるとは思つていなかつたんだろう。

「俺にはもう、契りを交わした兄妹がいる。今は情報を集めるために離れてるけど、そいつ等を裏切るわけにはいかないからな」

俺は真っ直ぐ曹操に言つ。

「つーーーそつ、やうわかつたわ、けど少しだけ私と来ない?私のところに来れば、少なからず情報は入つてくるわよ?」

「今、若干曹操顔が赤くなつたような気がしたよつな・・・・・・・・  
氣のせいか。

「ああ、それならいいぜ。」

俺は曹操の提案に乗る。

「やつたーーこれでまだ一緒にいられる兄ひやん!」

「しばらぐの間よろこべ頼むぞ北郷」

それを聞いた許緒は大喜びし、夏候淵も歓迎してくれた。

「あなた達はどう?私と来ない?」

つと曹操は俺の言葉を聞いて微笑んだ後、樂進たちの方へ向き樂進たちの勧誘を始めた。

「はっはー！宜しくお願ひします！自分の真名は廻ですー！」

「うちは真桜や！宜しゅうな大将！」

「頑張るのー！私は沙和なのー！」

三人とも嬉しそうだな。前々から入つて見たかったんだろう。

「期待してるわ。一刀とあなた達には私の真名を許すわ。私は華琳よ。これからよろしくね」

『はーー！』

「俺までいいのか？」

三人は元氣よく返事を返すが、俺まで呼んでいいのだろうか？

「ええ、彼方にはこの町を救つて貰つた事だし、しばらくは私たちと行動を共にするのだからね」

「そうか、俺は真名がないからさつきも言ったが北郷か一刀で頼む」

「ええ、わかつたわ。では、撤退の準備を始めましょう」

そういうと曹操・・・・・華琳たちは自分の部隊へ行つてしまつた。

その後、今までいなかつた夏候惇たちを含めてみんなの真名を貢つた。

途中、俺が笑顔を見せると、みんなの顔が真っ赤になつた。なんなんだろうな?

まあ、夏候惇もとい春蘭から勝負を申し込まれたて、軽く瞬殺し  
たり、

桂花から無茶苦茶な」と言われたりしたのは眞つまでもない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1586y/>

---

恋姫～朱い目を持つ青年～

2011年11月7日13時02分発行